

AA

日本ニューズレター No.91

AAの自立について考える「友人とのより良い関係を目指して」橋本 美枝子

AAと交友関係を結ぶようになって何年かが経とうとしている。友人として日頃から私がAAに感じていることを率直に述べていきたいと思う。AAにとっては辛辣な意見かもしれない。だが、以下に述べることは、AAやメンバーの方々に傷つけることを目的としているわけではない。むしろ、AAとその友人である保健・医療・福祉など関係者との相互関係をより良きものに発展するために、前向きに検討するきっかけとなればとの願いから、僭越ながら意見を述べさせていただくことをあらかじめお断りしておく。

なお、本文の内容については、地域の問題として考えていただきたいとの思いから、地域委員会の場を借りて直接お話をさせていただいた。真摯に受けとめてくださった当該地域の方々に改めて御礼申し上げる。ただ、ある方に相談したところ、「それは、その地域に限定された問題ではなく、他の地域でも同じようなことが起きている可能性がある。BOX-916に書いてもらえるのならば、AA全体の問題として考えるきっかけとなるだろう」との励ましをいただいた。そこで、あえて全国のAAの皆さんに申し上げる次第である。なお、これは一関係者の個人的な体験に基づく私見であり、関係者全体を代表したものではないことを付記しておく。

さて、前置きが長くなったが、そろそろ本題に入ろうと思う。正直言ってこの数年、私はAAのオープンスピーカーズ・ミーティングやパブリック・ミーティングなど、AAのイベントに出席することに、いささかためらいを感じている。もちろん、メンバーの話を聞くことは楽しみである。また、内心大丈夫だろうかと心配していた人の元気な姿に出逢うと嬉しくなる。「こんにちわ」「来てくれてありがとうございます」、そんな何気ないあいさつを交わしたり、しらふの生活を楽しんでいるメンバーの生き生きした姿とふれあうひとときも楽しみだ。

だが、どうしても憂鬱になってしまうのが、「関係者」として何か話をするよう依頼されてしまうことである。私はAAに好意を抱いているし、日頃からAAのメンバーには何かとお世話になっていることもあり、少しでも役に立てることがあるならばできる範囲で引き受けるつもりである。であるから、スピーチを頼まれることそのものは、決して不快なことではない。

しかし、どうしても受け入れがたいことがある。ひとつめは、突然「次のスピーチをお願いします」と耳打ちされたり、ひどいときには、何の予告もなしに、どれぐらいの時間話したらよいのかも示されぬまま指名されてしまうことである。私としては、まったくの不意打ちとしか言いようがない。「パスします」と言ってしまうかとの反発心も生まれるときもある。だが、面が割れているのだから無視したり、おもむ

に退席するわけにもいかない。さすがにそこまでやる勇気もない。前もって声を掛けてもらうならばともかく、突然の指名では逃げようがないのだ。断る権利はない状態に立たされているといっても過言ではないだろう。正直言って、その不躰さには腹が立つ。頭の中も混乱する。だが、逃げ場がない以上、壇上に登る他ない。その昔、ビッグ・ブッグの書名の候補として「出口」が上がったそうだが¹⁾、「神様、私にも出口をお与えください」という心境である。

仕方がない。変えられないものを受け入れて、「さあ、どうしたものか」と、懸命に頭を働かす。頭の中はパニック状態、内心では腹が立ちつつも、極力穏やかな口調で話すように努める(ささやかな抗議として、突然の指名で驚き戸惑っていること、事前に声を掛けて欲しい旨をやんわりと話しているのであるが、同じことが繰り返されるといことは、悲しいかな伝わっていないようである)。そしてAAにとって少しでもメリットのある話は何かと、懸命に言葉を紡ぎ出す。何分話したらよいのだろうか? まあ、長すぎず短すぎず。「ああ、何てとりとめのない話なのだろう」と、言葉を紡ぎながらも我ながら情けなくなってくる。講壇に隠れて見えないものの、水面下では足をバタバタと動かしているのである。

職業上、関係者というものはプライベートな時間を利用して参加していたとしても、メンバーからの役割期待に応える義務があるのだろうか? それとも、関係者であるからには、指名されることを覚悟の上で、AAのイベントに参加するくらいでないと、職業人としては未熟なのだろうか? ささやかな抗議も伝わらない現状に、いつの日からか、腹をくっつけて出かけるようになった。

それでも、メンバーが「関係者」の話に何を期待しているのか、その意図が未だにわからないでいる。それは、「関係者」の話に期待する割には、何を意図して依頼しているのか主催者側の「主体性」が見いだせなからである。もしも、「よその地域・地区では関係者に話をしてもらっているのだから、うちでも何か話してもらおう」とか「これまでも関係者の話がプログラムに盛り込まれてきたのだから今回も盛り込むべきであろう」というのであれば、あまりにも主体性がなさすぎると批判せざるを得ない。

「AAは自立している」とはよく耳にする。だが、それは伝統7に「外部からの寄付を辞退して完全に自立すべきである」とあるように、金銭に限ったことなのだろうか。金銭に関する自立については後述するが、「自分たちは自立している」と主張するならば、通常、金銭以外のあらゆる面でも自立していると受け取るものである。自分たちが主催している会合において何を話してもらいたいのか、その意図さえも示せぬまま、関係者に「何でも



結構ですから話してください」などとべったり依存しているようでは、とても自立しているとは思えない。

だからこそ、事前にスピーチを頼まれた場合には、なぜ私に依頼するのか、何を目的としているのか、どんな話を期待しているのかを問うことにしている。問われたメンバーは戸惑った様子を見せるが、それでもなお私が問い詰めるのは、「関係者」である私にスピーチを依頼するということが、AAの広報をする上で私の職業的立場を活用したいとの意図があるはずだと考えているからだ。AAが、共通の問題を持った人たちの集う仲良しグループではなく、「いま苦しんでいるアルコール依存症にメッセージを運ぶ」という目的を達成するために、メンバー自身が主体となって機能しているセルフヘルプグループであるからには、自分たちの足で立ってもらいたいのだ。

しかしながら突然のスピーチ依頼では、AA側の主体性すら話し合う余地もない。だから、AAの意図がわからぬまま、「きっと指名されるのだろうな」と、腹をくくって出かけたものの、常に居心地悪い心境で指名される瞬間を迎えるのである。

何を話そうか考えているようでは「正直でない」と批判される方もいるかもしれない。しかし、私は有名人ではないが、メンバーのように無名で話ができる立場ではない。スピーチの前に、必ず、所属、肩書き、名前を紹介される以上は、専門的な立場としての役割期待を寄せられて指名されているのであろうと考えるのだ。もしも、ノンアルコールの立場にある生身の人間としての「正直さ」が求められているならば、所属や肩書きなど必要なく、「AAの友人の　さん」と紹介されるはずである。それならば、生身の私として、思いついたまま自由に話をしよう。その代わりに、そこで話したことは、メンバーと同様、その場に置いていっていただきたい。　の　さんが、ああ言っていた、こう言っていたなどと口外されてしまうのは、肩書きを背負い自分の言葉に責任を持って話す職業人としての私ならばともかく、無防備で生身の私には到底耐えられそうにないからである。

それにしても、関係者のことをAAの「友人」とは、よくぞ表現したものである。恋人でもなければ、まして夫婦でもない。あくまでも「友人」なのだ。だから、別れるのに面倒な手続きなど必要ないし、複数の人と親密な関係を持っていても何の問題も発生しない。極論を言ってしまうと、相手にその気がないのに一方的に自分の思いこみだけで「恋人」のように振る舞ったり、性的関係を迫ったり、つきまとったりしたのなら、「ストーカー」「セクハラ」と問題になる。しかし「友人」ならば、たとえ一方的な思いこみであったとしても、「あいつは自分のことを勝手に友人だと思いこんでいるみたいだけど、まあいいか」と、軽く受け流すこともできるのだ。こう考えてみると、「友人」とは実体があるようなではないような、曖昧模糊とした人間関係なのかもしれない。

また、「友人」とは、どの程度のつき合い方をしたって構わない関係でもある。親密になろうと、表面的であろうと、つき合いたいときだけつき合うという気まぐれなものであろうと、つき合い方の選択は幅広く、互いに自由なのだ。だが、自由度が大きい分だけ、友人という関係は危ういといえる。友人関係を継続するには、まして「親友」としてつき合い続けたいと願うのなら、互いの立場を尊重し合うことは必須である。

果たしてAAは、関係者とどんな「友人関係」を望んでい

るのだろうか？そもそもAAにとって、友人とは何であろうか？本当にAAには友人が必要なのだろうか？何も関係者の友人などいなくとも、AAの仲間だけで充分ミーティングやイベントを運営することはできるだろう。真剣に実践しているのならばステップの効果は絶大なようであるし、メンバーシップがうまくいってれば、しらふの生活を充分満喫できるのではないだろうか？なのに、なぜAAでは関係者を「友人」と定義し、友人関係をつくらうとするのだろうか？ぜひ、メンバーの方々の考えをお聞かせ願いたい。

ところで、スピーチといえば、結婚式を連想する。通常、結婚式の披露宴でスピーチを頼む友人は、ごく親しい友人である。「自分にはこんな友人がいるんだ」という自己顕示欲の固まりではない限り、社会的地位は高いが表面的なつき合いにすぎない友人になどスピーチはおろか、よほど招待客が埋まらない限りは、披露宴にさえも招待しないだろう（もっとも、招かれた方も戸惑であろう）。無礼講の二次会ならばともかく、披露宴の席でスピーチを依頼するほど親密な友人でさえ、前もってお願いするのが礼儀である。それなのに、なぜAAでは関係者を「友人」と表現しながら、前もってスピーチの依頼をしないのか、私にとっては不思議で仕方がない。

ひょっとしたら、メンバーは即興で正直に話をしているのだから、まして関係者は「プロ」なのだから、何の戸惑いもなく、言葉なんて泉のごとく湧いてくるものであるととらえられているのだろうか？もしも「関係者」というものに対し、そのような期待が寄せられているならば、「残念ながら、私は不適格です」と辞退しよう。

受け入れがたいことこのふたつめは、社会的に見なされている序列を飛び越えられることである。これも、披露宴を例にして述べてみよう。通常、披露宴におけるスピーチや芸当は、社会的序列にしたがって展開される。まさか、命を投げ打つてでも惜しくないほどの「大親友」だからといって、主賓の挨拶を差し置いて「友人代表」のスピーチを優先するなどということはしない。内心、「委屈だ、面倒だ、馬鹿馬鹿しい」と思っていたとしても、守るべき順番は守るとするのが社会的常識である。

それがどういうわけかAAでは、ときどき社会的には常識と考えられる順番を飛び越えてしまうことが起こるのだ。おそらく、個々のメンバーは、普段は社会人として守るべき順番をわきまえた行動をされていることだろう。そうでなければ、仕事だって上手くいくはずなく、クビになるか窓際に追いやられているはずだ。だが、ひとたびAAのキャンパスに入ってしまうと、AAメンバー間における「対等」を、関係者にまで持ち込んでしまうようである。

断っておくが、私はAAにおけるメンバー間の「対等性」を心からすばらしいことと敬服している。たしかに、メンバーも関係者も人間として対等である。関係者にしても、職業や肩書き、年齢、性別などの諸要素によって、さまざまな序列が歴然としているものの、人間としては対等であることに変わりはない。だが、一個の人間としては対等であっても、「関係者」という職業的立場を背負っている者にとっては、上司を差し置いて何かを頼まれたり、自分よりも社会的地位の高い人を飛び越されたり、最も大事につき合うべき地元の関係者を差し置いて、他地域の関係者を優先するなど、AAの常識（対等性）を持ち込まれてしまっても戸惑うばかり

である。

もしも、課長であるあなたが結婚を控えた部下から、「部長なんかより、いつもお世話になっている課長に主賓の挨拶をしてもらいたい」などと頼まれたりしたら、気まずい思いをするはずだ。きっと、部下と部長の関係、自分と部長の関係、さらには職場内での人間関係がおかしくなってしまうのではないかと心配し、部長にスピーチを依頼するよう部下を諭すことであろう。それと同じように、関係者にとっても序列を乱されてしまうと、気まずい思いをすること、その後の関係を心配することを理解していただきたい。

「いや、そんな序列など馬鹿げたことだ」と、反発を覚える方もいるかもしれない。しかし、忘れて欲しくないのは、保健・医療・福祉などの世界は、序列が歴然としていること、しかもAAは、その序列が歴然とした世界の人間とつき合っているということである。社会的な常識を踏み外し、AAの常識を平然と持ち込まれる以上、「つき合いきれないと」AAから関係者が離れてしまったとしてもそれは仕方がないことである。何といても関係者は「友人」にすぎないのだ。だから、つき合い方を選ぶことができる。愛情が冷めたのならば、自然消滅してしまう恋人のごとく、当たり障りなく静かに身を引く関係者がいたっておかしくはない。

ただし、関係者のなかにも例外があることも知っていたいただきたい。都会のように関係者が沢山いるところならば、静かに身を引くことは可能である。なにしろ、自分ひとりが抜けたって、まだまだ代わりはいくらだ。ところが、ひとたび地方になると関係者は俄然少なくなる。その中で身を引くというのはなかなか難しい。かつ、関係者としてもAAは「いま苦しんでいるアルコールク」を助けていただくための貴重な社会資源なのである。だから、AAに対し何らかの否定的な感情を抱いていたとしても、「いま苦しんでいるアルコールク」を助けるという自分の仕事を遂行するためにも、そうそうサヨナラするわけにはいかない。AAも関係者もほど良い関係で共存する必要に迫られているのである。日本全体を見渡してみれば、地方が大勢である。そう考えると、関係者としてより良い関係を保つという課題は、地方が抱えている深刻な問題であり、地方が大勢である以上、AA全体で見直さなければならない問題といえる。

幸い、私が提案させていただいた地域では、真剣にこれらの問題に向き合ってくれているようである。その謙虚さに感謝したい。が、AA全体の問題として考える必要がある以上、当該地域だけが棚卸しをし、埋め合わせの努力をし、述べ伝えをすればすむものではないだろう。評議会・常任理事会を含め、AA全体サービスの中で、ぜひとも取り組んでいただきたいと考える。

さて、本来ならばここで苦言は止めにするつもりでいた。しかしながら、「どうせなら3つ目の問題も書いてもらった方がAA全体の問題として取り上げてもらえるのでありがたい」と、地域のメンバーから勇気ある提案をいただいた。「長くなってその1、その2となればいいじゃないか」との言葉に励まされ、長丁場になるがもう一つ私の中でわだかまりとなっていたことについて述べさせていただきたい。

これは関係者の立場からは言いにくいことであるが、スピーチに対する謝礼のことだ。先刻、あるイベントで、あらかじめスピーカーを頼まれた。その際、「AAにはお金がないのでお礼は出せません」と、あっけらかんと言われた。あまりにあっけらかんと言われたものだから、こちらは唖然とし

てしまった。まあ、こちらはそもそもAAで金儲けしようとは考えていないので、別に謝金についてはどうでもよいといえどもよい部分でもある。

だが「どうでもよい」で済ませてよいのだろうか。AAメンバーの場合なら、「あくまでも職業化されずアマチュアでなければならない(伝統8)」とあるように「無償」が当たり前である。だが、関係者までも無償というのは伝統7「すべてのAAグループは、外部からの寄付を辞退して、完全に自立すべきである」に抵触するのではないかと疑問を抱いていたからだ。だが、「ない」と言われてしまうと、「出せ」とはさすがに言いにくい。また、恥ずかしながらも、謝金を要求して「欲張り」と思われるのも嫌だなどという、変な見栄も働いてしまうのだ。だから、納得はできないが、「まあいいか」と気を治めたのである。

ところが、幸か不幸か話をさせてもらいに行った地域委員会で、イベントの余剰金をどう分配するかとの議案が出され、その金額を知ってしまったのだ。提示された余剰金は、私の予測を上回る金額であった。その配分を巡り、さまざまな意見が提示されたが、金がないからお礼は出せないと言われた「関係者」への謝礼などという考えは微塵もでなかった。私はあくまでも委員会の場では、オブザーバーであるため、意見を言う権利はない。ただ、なぜメンバーは「金がない」と言いながら、これほどの「余剰金」の存在に疑問が出てこないのか苛立ちを感じるだけであった。

ちょうど昼休みに入ったので、たまりかねてあるメンバーに「私は"OhmyGod!"という気分よ。金がないからお礼は出せないと言われ、あきれつつも黙っていたけれど、余剰金の額を聞いて驚いた。余剰金がありながら私たちに謝金を払えないというのはどういうこと?話す方は、スピーチに向けてどれだけ時間、労力、知力、体力を費やしたことが。AAは外部からの寄付を一切受け取らないといいながら、これらの労力に対して謝金を払わないことが、イコール外部からの寄付を受け取っている結果になっていることに気がつきませんか」と言ってみた。そのメンバーは驚いた様子で、「今言われて初めて気がつきました」。そして、「実は、先行く仲間からAAでは金を払ってはいけぬ。本を贈るんだと言われ、それを鵜呑みにしてこれまで来てしまいました」と打ち明けてくれた。では、今沸き上がった伝統7の問題について、どうしたらよいと思うか問うてみた。「ぜひその問題についても提案してください」との回答であった。

昼休みが明け、委員会の貴重な時間を割いていただき先の提案をした後に、予定外ではあったが、余剰金の中に「外部からの寄付」が含まれている旨を指摘した。見渡す限り、メンバーは驚いた表情であった。AAの場合、多くは悪気はなく、単にまったく気がつかないまま過ちを犯してしまうようであると聞いたことはあるが、本当にまったく気がついていなかったのだなと実感した。伝統7に抵触しているという事実は、先の友人関係についてよりも堪えたかのように見受けられた。

私は、AAの中でも「12の伝統」が好きである。私が伝統に好感を抱いている理由は、上手くいったことよりもむしろ、後に続く人たちが二の轍を踏まぬよう徹底的に正直に、失敗した経験を書いているからである。これこそが本当の謙虚さであり、ビル・Wの尊敬すべきところと感じている。

ただし、何人も間違いを犯す権利がある。私も数々の赤面するような過ちを犯してきた。おかげで、少しは賢くなって

いる(と思う)。伝統だって、数々の痛手を被ったおかげで学びとった経験的な知恵の蒸留である。せっかく犯した過ちを過ちのままにせず、またこの経験を特定の地域の問題、ないしは、過去の問題と処理することなく、ぜひとも後に続く人たちが同じ轍を踏まぬよう、生きた知恵としてわかちあっていただきたい。

たしかに過ちに向き合うこと、それを改善していくことは大変なことである。まして、過ちを後世に述べ伝えることは非常に勇気のいる行為である。けれども、AAには12のステップというすばらしいプログラムがあるではないか。このプログラムは、「私たちのすべてのことにこの原理を実行しよう」と努力した(ステップ12)」とあるように、あらゆることに適用できるのだ。

このたび地域委員会の中で提案させていただいた後、ある評議員の方が次のようにおっしゃった。「何もヨイショするだけが友人ではない。言いにくいことを言ってくれるのも友人である。AAの目的は酒をやめることではなく、社会の中で自立することである。そのためには、関係者と対等に話し合えるよう自分たちが成長しなければならない」と。その通りだと思った。関係者に媚びることなく、依存することなく、自立した成人としてお互いを尊重しあいながら関係者・機関

とよいコミュニケーションが取れていくことが、今後AAに求められる理想の友人関係なのではなからうか。

25歳を過ぎ青年期を謳歌している日本のAAは、来る30周年に向けて評議会憲章の準備に取りかかっていると耳にしている。しかし、その前に棚卸しが必要なのではなからうか。今回提示した、AAの関係者とのつき合い方についての問題を棚上げにしたまま評議会憲章の採択に突き進んでしまっても良いのだろうか?問題を棚上げにしたまま、形だけがどんどん作られてしまっても、中身が成長しないままならば、せっかくの評議会憲章も形骸化してしまうのではないだろうか?外野ながら、憂慮してしまうのである。

どうかAAが、ハイパーパワーの意志に耳を傾けられますように。

きっとハイパーパワーは、良い方向に導いてくださるだろう。今後AAがどのような道を歩むのか、それはAAが決めること。私は、ハイパーパワーの配慮を信じて委ねるだけである。



¹⁾AA 日本出版局訳編：アルコールクス・アノニマス成年に達する,AA J.S.O., p.253-254.1

『棚卸のすすめ』

～橋本美枝子さんの原稿掲載にあたって～

広報担当常任理事：木村

今月のニュースレターは、日本AAの友人として多くのメンバーに沢山のメッセージを送り続けていただいた、橋本美枝子さんからの長文の原稿を掲載いたしました。

橋本美枝子さんは、現在、大分大学 教育福祉科学部 社会福祉コース教員のお仕事をなさっておりますが、ノンアルコールとして日本AAのサービス活動を実践(全国評議会の書記、前回のメンバーシップ・サーヴェイ集計など)された方で、全体サービス経験者の多くをご存知の方であります。

今般、橋本さんがこの原稿をAAにお寄せいただくにあたり、複数の全体サービス経験者、地域サービス委員会等とも話し合われた結果、「BOX 916」の原稿として執筆されました。この過程でご本人の要請もあり、事前に原稿内容を受けた「常任理事会コメント」を用意すること及びBOX原稿としての「妥当性」(「ニュースレター原稿」としたほうがベターとの意見もあり)を常任理事会で検討し、とりあえずはBOX編集委員会へその判断を委ねました(2001年第5回AA日本常任理事会議事録参照)。

その結果、ニュースレター本号への掲載とさせていただきますが、AA日本常任理事会としての内容へ立ち入ったコメントは、現段階では行うべきではないとの判断をいたしました。

ただひとつ、AA日本全体が「棚卸」の時期に来ているとのご指摘を受け、「棚卸」がAA日本常任理事会の今後の重要なテーマであるとの認識を持っていることは、先にお伝えしておきたい。

2002年2月7日(木曜日) 14時(13時30分開場)

国際シンポジウム
AAアメリカカナダ常任理事会A類常任理事
ウァリアント先生を迎えて
港区白金台
国立公衆衛生院講堂(3F)
詳細はJ.S.Oまでお問い合わせください



定員200名(申込先順)
2002年1月10日受付開始

AA日本ニュースレターNo.91

編集・発行：AA日本ゼネラルサービスオフィス(JSO) 〒171-0014 東京都豊島区池袋4-17-10 土屋ビル4F
TEL:03-3590-5377 FAX:03-3590-5419 ホームページ <http://www.cam.hi-ho.ne.jp/aa-jso/>